



北都君君 蘇程格の叔少 千實テ見セシモヨ
 サラシ物デナ 哉

天竺 天上天下 唯我獨尊
 一千八百八十八年

北都 千實

北都芳

寒燈 小栗外傳 卷之八

東都

絳山戲編

第十三編

處女佛堂小虫像を青葱と
 貞婦浴室小良人并奇遇

204
 7/10

東學

且説小栗判官代助重之藤沢寺の常阿上人の亦あり。時運の至るを
 待んとて三州一村山といふ地方一閑居して世の光景を窺ひたり。此亦三州の
 うらみても北に寄る邊鄙なれば人の知く少されど又世の事を知り
 ぬるも、今主従斯合ひ居らん。いふも辺鄙なれども人小疑らざる
 禍事連ふを暇なく且之敵の動静を便に便なくそのうら大歳と起
 代々の旧臣なる懸れ居るを拓き寄人小便悪くさう從譯者
 定むる事多しち美登小を郎の事をさめおれ残る者を修繕者

順礼梵論傍猿牽。統経師るんご粉打せ鎌倉よかちて一色。解を定むせ
 千のこの舊國下総下とせ旧好のりのを密お任せたり。小栗二村山
 の麓よかちての庵を管み美登小を郎と主従二人山水を友にして
 居るのしがはじめの程の少くは財ありし故糧あり事かちてありしれど
 巨万の富も居らざり食ふ不ぞるおひよて幾月を経やと財も乏く
 たりぬ斯くもさるる后の飢饉お迫りるん。今日とるさるりの生管
 をせん主従相識とも武士の果を造鄙は居る用なりりのめて糧の
 料を取らんは術も多し殆難多に及びり小栗世お栄一とれ多しの養
 身遊びはるるろ文武の道化生質悪を好むれ其術は賢く古乃
 金固もち勝ちき字力ありら。武士のめさるは術ありはと
 世は技密もせてありしと今急迫貧困の才となり。不我の財を貪ん

よりはと多くの槍を馬に宗丹といふ名を記し。美登小を郎は持し當國を
 さるるり京まで賣し其は雪舟とんと父をいみきし。雪舟は
 足もこの世は行りれ其運をさるりの財もさるるれ主従はを粘るる尚
 あまりのけりけり。此里おめでとるる農夫あり宿願のりありて
 美濃國寶光院の虚空藏は後馬を奉納せんと小栗かりとれ。りり
 たりは某は某國赤坂の虚空藏は後馬を奉らりやととると然あるに
 馬二一足下の當世二あるは社まにゆき其が奉納する所の務る
 を馬のりれしと頼こまのり小栗今業とま枝るれは子細なく
 端ひぬ彼人喜び一れをのて又すは。當國八指の里の古地よりれ名所
 あり。世は知れらるるなれ。在五中ね旅衣の歌流るる形を重んずるま
 といふ小栗いと易れとふと同意たれ。彼人のよくむし齊らし。

繪馬と小栗の家よりめかれ重具の料までをけけ眼をくらめり
 夕陽が幾日もあつて一歩も一歩も彼人喜ひは堪へざるに謝儀をさへ往り
 赤坂の宝光院へ送るを身納かりに夕陽も此後馬勝れり
 物もねる小栗平の容貌よく小栗は似たりなれ小栗を知りぬ此後
 を観て昔より重工人物を字せ自らおのれが容貌は似りのありと云
 が此画のこゝ画人は似りのありと口順うは小栗が安藤の生竹見世
 知りたり爾は福女と此後馬を觀てこゝぬ喜ぶ心を煩はせり
 且説美濃國青墓の宿万長一人の女兒ありり。名を花見と呼ぶ
 人は次女親の歎つた。鄙に似げられ美女あり。人の親の心より醜女
 人の子はよくねばより立務りて足ゆらるる小栗平。数々の且て
 夫婦の心も竹取の翁がむひを掌中の壁柿の華と愛する女脚と云

こそめ及ぶまじあられ官禄とも高れ公達みくで女塔とせ。教の
 宝を費し和歌を伴の師を京師より呼び之只願その業をのみ学ばし
 ちり光陰閑守好く花見今年二八の夏をむくは母。年以和歌を山行
 女身を委ぬはる。勞もや心ち好らる。霞食をも易く。母は父母
 これを尋ねて医療を多くせし。されど。これ繪も入。と。衆醫師
 のいふ。原此病と。精神氣より。發して。俄に茶の効もある。心静。精神
 程をさせ。自ら氣も解。藥餌の力も驗めんと。泥渝されて。實さる。母
 もあつんと。これより。夫婦の花見が心のす。遊觀のこと。のみ。た。し
 ちり。このに。昔墓と。赤坂との間。ふ。金生山。宝光院と。て。い。に。精。合。有。り。本。ま。る
 と。虚。空。を。蓋。し。薄。く。て。大。巖。の。中。に。安。置。し。て。は。靈。驗。得。る。妙。り。て。都。鄙。の
 先。若。千。里。を。も。遠。し。と。せ。と。お。を。運。ぶ。り。の。少。く。は。此。山。上。より。東。方。を。眺。望。す。

ねぶたの里杵津川美穂の里と眼下ありて風色いそんうと色殊と橋
 多々ねがりのり三春の流り美穂の里とありさねが万長夫婦をいがふれ病
 おとくくん中うと此虚空藏菩薩と祈り且も山色の佳景を遊記きと
 るく万長夫妻小岳花見を俱して宝光院と美穂御佛の寢殿とくく
 ぬる眼を祈りき其後宝殿の四方と願りて種々の鞍馬を所狭ま
 懸並ぶるうろく彼小岳く重くは在五中ねの繪る勝とてんえたれ花見
 ぬれぬ眼をとめ熱く着るく人物草木悉くその具をえぬくさく
 繪り写せしと想われどそれの中ね在五中ねのさぬ生て言うとく
 顔色のぬる姿の都中うはら今世小えりいすも及ぶとすれ美穂男
 かねが花見これよ公春あらは養女情頻りて心裡念をるす女子
 うねりのかには男子と夫とせよ世よめる甲斐ありぬとさるい今入



上段女寫一画

思海ホ
一姫
樹



花見

小笠

小栗

世間小此君は似たる人の命を擡て達せん世を隔る甲斐なきこと
とよしなれぬ思ひが折るに傍は二人の漢子あつて物給をたて
笑ハ一人の云中。此宝殿の裡に掛る後馬も多けれど。在五中ねの八橋お
休あつて字とれこそいと愛しくらひけれ。実美男の父えある業平公の
斯くもあつて人世の未に至りては此君も似る人もはしとららから
けれど二人の漢子足下この後馬を字し画人を知らざればさ世の間を
そらふともか某の此画人宗丹を知り。字し後其人の貌をのりて
むじしより云ふははしはるが宗丹が容貌この後馬の中お君ふよくも似
たり。宗丹は烏帽子袴衣をせしはしうが則この後馬の中お君
を。宗丹へへ前の漢子嘆息し。さて今の世もか。は淨ふもあり
なほよ潘岳も劣らぬ人。我の男子が。此人と枕を共せんとこと
ゆが命をも厭いと。儂戯も去小。花見の此説話をうりゆめく。
さて字後のごとれ男のなれ昔の人と想ひに。正しく今世も有るよ
とそら小恋をゆ増れ。母の小娘の女見があらを知ら。凡そ之美絶を
祝さし。樽を散せしやと。呂俱し。下僕をして。ある花の下小徑
を敷。幕ととし。齋し。榎を閉き。酒をま。歌舞を催し。花見
かむをそのつもとくと。花見が。宗丹が。のみさ。花をくれども
後馬の中お人目のありてさ。小心中。樂まむ。樽として。居り。此
南村西園三十三所の観音殿。順れも。道者の年の辛小も。ん
ぢん。前刺より。休り。居る。花見が。花見を。并
を。同じ。其邊を。緋細。知。六尺。も。若く。壯なる。悪漢。も。若く。壯なる。悪漢。も。若く。壯なる。悪漢。も。

伏流して居る小母我子の身上を危うきと申ししをせん。心を
 悩まど折うに深羅笠を面を蔽ふ。研める馬車うちをめて此所を
 行く侍のり。小母の幕の裡より此人を見女児が手を走り出馬の響
 ぶらり。えうけをりて頼むはあらずと目今母子不圖危難に遭
 命のほどもそそ米なつらぬ。あそれ助けたりけしと涙とこもに悔
 ねとあつたれ彼人咳然として。いまご回意あも及がぬ。耐悪漢
 返ひまのり有きをもいつご枝けして。馬上の人を斬るか。は馬
 声を揚人くまのりのふりまもひも我足下ホ何の仇の怨を受つ
 此の仇をえなれりのを人差ひじ。志あひと制をれども。越つ
 素より汝をば。い。と好れが仇も。今世解母及。と薬をとりし
 女性ふたむ。子細のあるあを。と占愆。と。と。故止事な。と。做
 りも命惜く。女をよへよ。我勢。と。目お物。と。聞ひあり。
 馬上の人。微ぞ。兇鳥。腹。い。獵夫。も。こ。を。殺。と。世の。法。も。あ。
 な。目。今。これ。る。二。人の。女性。縁。故。の。知。れ。と。身。命。に。及。ぶ。危。難。
 を。助。け。て。よ。と。云。う。け。れ。両。刀。帯。は。身。の。あ。ひ。退。は。退。れ。れ。此。場。の
 勢。汝。ホ。い。う。も。做。と。て。も。一。回。の。援。け。ほ。き。と。ぞ。し。か。う。か。手。柄。は。此。女。性。を。
 棄。て。て。よ。よ。と。云。う。け。馬。より。ゆ。く。と。飛。下。り。二。人の。女。を。彼。下。よ。忍。ら。せ。
 牙。を。入。は。して。さ。ん。と。と。立。寄。が。斬。ん。光。景。も。悪。漢。ぞ。も。の。欺。き。笑。ひ。一。斬。
 車。の。火。を。消。と。一。杯。の。あ。を。り。と。と。る。か。こ。じ。ら。れ。ぬ。義。勢。た。と。て。
 後悔。せ。と。い。は。に。言。罵。り。て。援。連。ら。斬。り。か。ま。の。援。合。し。多。勢。を。相。手。
 小。一。人。秘。術。を。こ。一。戦。ひ。が。悪。漢。多。勢。あ。り。と。わ。ら。く。も。一。人。の。人。は。敵。
 か。く。強。手。汝。も。勢。な。り。の。も。好。く。渾。刀。を。引。く。還。去。り。相。手。な。ら。ぬ。と。を。

彼男刃を鞘お納りけ。汗もぬがひ声を揚前の女性お多人故に逃くはあ
何方へも去多人我おも亦用のゆて心のきんがかりてこえまきうさんと
去んとそれな小毎親子忍ひ居りし木陰を立出しやのあ勢耐まら
多人今日不料福めて母子こよなり夏同小達しのちの行も危あまき
おんこの深き恵ふより斯恙なく免と。恩を報りてこねへき。いつたが
家の此よりして遠くは行も隔ら移が。まづく。しひ孫と。しひは
面を合さか。そのもいり此人を後馬お写すは業平お露も差らね
教をせお見と想ふその人を不図してえらるれ。夢幻とも并くこ
なく。さうく胸をお。ちめ再生の恩を感謝して。名をい。小宣の
いと懇。再同たれ。其耐彼人微笑て今日の。其。力の及。所。母
あ。正。當寺の。佛の。助け。あ。お。ほ。せ。し。さ。ま。の。我。れ。を
宣ふ。其。及。ば。我。又。其。報。を。受。は。か。た。る。性。を。各。生。見。き。あ。あ。ん。と
と。ま。ご。お。辞。去。んと。それ。の。母子。を。控。ま。し。ち。め。只。願。同。く。願。され。ん。
彼。男。も。母子。の。志。を。感。じ。さ。ま。の。宣。を。各。告。ね。も。れ。け。其。三。州
二。村。山。再。往。す。は。宗。丹。と。す。この。あ。て。ぬ。と。父。より。花。見。を。さ。す。て。の。あ。ま。り
狩。馬。を。守。その。人。う。この。あ。ま。り。あ。ま。り。と。そ。の。落。心。の。限。る。た。忍。の
み。が。れ。君。の。志。と。胸。苦。下。に。折。く。お。母。の。小。毎。の。子。心。を。爾。ち。は。し。も
宗。丹。を。ひ。き。こ。め。て。さ。り。り。は。あ。ま。り。足。下。の。三。州。を。は。し。す。と。此。あ。ん
程。も。遠。く。さ。ま。の。今日。と。此。邊。お。宿。り。を。借。り。す。と。さ。り。ら。ひ。奴。家。を
青。草。ま。り。往。り。今。夜。の。我。家。ま。り。り。の。れ。し。と。云。は。け。誘。引。ん。と。此
耐。前。刺。逃。還。り。し。奴。婢。の。告。め。て。主。万。長。登。る。き。慌。忙。家。内。に。奴。僕。を。始
日。ころ。親。しく。出入。を。は。近。辺。の。人。を。雇。ひ。妻子。が。危。難。を。救。へ。と。目。今

宗丹をひきこめて

三州を

此地は走馬を小番にやうもあれをよめて好時とて喜びて慌忙夫
 卒とて宗丹の力によつて母子恙なきことをおぼゆる。有枝が書を洗沽
 万長かきりおろす。喜び宗丹が對ひ恭しくれをのへ妻子が指をさくらひつる。
 感謝をのべてしけれ。妻子が再生の恩人のいふに此まゝ還しやうのせん。
 今夜の是非ともはひまゆらせ一杯の酒を遣はせり。九牛が一毛の恩を報
 まうさんと強よ誘ひて。おのろ家路に赴きたり。ともく今日頼れを悪漢
 本と闘争。その始万長が妻子よ及びぐる。是渾岡戸ホの謀計。あま
 花見が容貌の美麗をよめて匂ひきんぬる。いと頼れお打打る者
 と。岡戸三田小栗をあてそありたり。且説小栗は万長を誘ひその家へ
 至りし。主万長前驅とて家へ走入り。恩人のいふにせよ。あまは誰とて
 門戸おちく。遠くは誰の酒肴のまらけせよと罵りつる。と遠く

入れぬの限り多くお接待は花見の我多々人のすけつをまきひ病も
 あつたり。おちく。おちく。おちく。自ら配膳をすれ。父母の女見が忠告。お
 小栗を接待をよめ。其を知らず。今日の危難を助けられ。嫁しき。嫁しき。
 病もあつたり。心もさびしく。おちく。おちく。おちく。小栗をまき。おちく。おちく。
 がん意もおちくと。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。
 と。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。
 念の志をよめ。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。
 宝光院の虚空をへ。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。
 助けられて。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。
 と。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。
 恩人。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。おちく。

びきとどく。それより別れを告げて路を分ちて。よと細中り云合
 け。慌忙奥の方へ入る。小栗の主の命なり。林の用意。客人の撃
 おき。馬の傍へ行くと着る。不思儀や横山安秀が飼わく。はは馬
 みて小栗の徳。鬼駟をねら。志を小栗の夢。初も并方。扱今夜乃
 客人の我夫小栗ののれ。さうして。何う故ありて。今其主の替りしや。
 さあ。ても此馬を。おぼる。のの。東國。我夫。うて。又化。ありとも
 おぢ。ぬり。のうら。に。おま。れ。今宵の客人を。えま。く。と。下婢の奥。こ。の
 叶。の。力。及。つ。と。お。わ。く。と。彼。鬼。駟。林。の。風。呂。水。と。汲。く。火。火。焚
 け。の。奥。の。この。光。景。い。う。め。と。は。奴。の。身。遙。よ。の。ある。琵琶の音。の。此。家。の
 女。兒。花。兒。が。あ。ら。へ。と。お。は。の。は。今。様。唄。の。声。を。け。正。しく。夫。助。重。の。声
 音。よ。く。も。彷彿。し。う。な。が。り。以。て。踏。踏。る。ま。世。を。思。ふ。を。も。ら。ら。忘。れ

意。き。夫。ま。ん。人。と。殆。奥。入。と。ん。と。せ。し。忽。ち。多。ひ。久。を。申。う。今。様。合。合
 殿。の。勢。ひ。強。く。此。國。ま。で。も。伏。し。わ。ら。ふ。は。勘。定。受。我。夫。の。その。身。の
 上。を。咽。し。ま。ら。し。う。る。難。や。遭。ん。づ。め。さ。あ。れ。り。も。連。入。る。互。お。忍
 身。の。さ。が。を。知。り。て。こ。ろ。ん。悲。し。ま。よ。さ。の。奈。何。と。宜。く。ん。と。免。さ。ぬ。用。さ。ま
 相。心。ひ。屈。し。心。を。悩。ま。折。う。ら。ん。を。や。湯。も。よ。か。ん。あ。ん。の。さ。ま。ま。や。と。て
 娼。妓。亦。宗。丹。を。誘。り。浴。室。に。照。天。の。衣。ひ。宗。丹。を。あ。り。仰。け。り
 兄。あ。づ。れ。が。ま。づ。う。方。お。き。夫。な。れ。あ。る。袋。と。い。う。ん。と。と。れ。と。人。目。の。関
 を。憚。り。て。ほ。る。胸。の。苦。し。ま。の。ゆ。え。壁。を。穿。ち。も。な。く。流。る。涙。を。せ。ま。き
 の。人。様。が。も。知。ら。ぬ。宗。丹。を。風。呂。の。裡。より。小。萩。を。入。る。お。破。垢。つ。き。し
 衣。を。脱。ぎ。髪。の。撻。と。乱。せ。り。瘦。瘠。は。消。瘦。し。女。を。れ。と。鄙。お。目。か。り。と。れ
 次。女。親。の。あ。ら。う。る。人。の。零。落。を。知。る。賤。し。た。事。を。か。と。る。と。い。と。と。東。山。く



小栗卷之八

小栗浴室

照天
會還

小栗分室

花見

照天

十一

春一着のあな怪しき事過しに六浦の里にて別れ。妻の照天よ彷彿
 くり彼も此方をうちこめて涙さしむるなればさういふ我妻うらねて
 より。寄方なうて此所へ吟呻する下婢と身を零落て忍ぶや。不便乃
 者の光景やと心も空しく胸裏まじいりや妻と云んとせよ世を忍ぶやと
 志ぬ角も人目を厭ふまじきれば傍に侍る娼妓も漏れん身を憚る
 うまじく心をぞもづめ堪へ忍ぶと誓ふ妻をえらむが一言のこのい
 このかみりぬら。いづるの因こる浅猿や。せめての事よ他亦うづら妻の
 身の上をなると風呂より揚りて娼妓は對ひいり君をうちあまふ火火
 林にて侍る下婢の容貌の麗しくいふ君達のごとく安否を尋ねば
 いと涙したてあて侍るとありければ娼妓もうち笑ひて回應す。その中
 者娼妓とくみおと。ぬの女性の名を小萩と申す彼が身もあましく長
 物給のゆを語りしきりしやうかへん厭ふとせよと聲を放しけり。結出る人
 去年の秋に季のうらま主万長も用をとりて遠に國をありけり。其時侍
 岡戸三田小萩と申すやけが東國方にて勾引し侍るよりぬ。此小萩と申
 万長もとある。四百貫文にて買ひぬ。万長の良女を買ひて公衆し。これ
 ちて娼妓とせり。良客人の身もぬとまきひ誘引還りて流しをせんとせぬ
 認め諭せし語を断下婢とあるり侍りぬ。その事故ありて夫も別れむらり
 枕を守りあてありぬべし。かむらりれ女子の今世よいと珍らうふの侍る
 やと云々これれ小萩と申すを侍らうより。切なる志なき不便もあ
 一宿をとりさくむらり。あほろく涙を汗に終ら。袖りて教をおしぬらひ
 中よのくも小萩こかりん泣く身より今世よいとも憐れぬもや。奈何なる
 人の妻よとて爾等流るるあましく思ひぬらう人ほがらぬ艱苦をある人

えつるまきと... 此言語を... 明白の... 小栗の... 契を... さらばと... 娼妓の... 悪漢命を... 忠臣主を... 赤坂原

第十四編

此當時万長が... 湯み... よろ... 別と... 又更で酒肴を... かりぬ... 睡寝ら... 小栗の... 赤肴を... 懶く... 痛く... 更圍て人... ちと

又更で酒肴を... かりぬ... 睡寝ら... 小栗の... 赤肴を... 懶く... 痛く... 更圍て人... ちと

けりて旅夜いひねのまをゆり寝るかたもい緑林きよりの白波あはれと耳みみを側そばよきく
 妻つまの声こゑもいれはさすては最さい多たよともいづら今宵このよ忍しのべと謎めをこ猜な解げここと
 といぢひつこ樞しゆをい用もちたとまんとせしが又またおひかへと申すは斯このよ燈あ火ひのありとて
 人のひと咎とが人ひとこももこそとかえのこ小こ袖そでをい燈あ架か母ははうち掩おけられが鳥う羽はの
 黒くろ夜よ迷まよふは慈あはれの心こゝろ照あ天あま姫ひめをい甲か夜よ因よども夫お見みえとと
 人ひと目めをい憚はげて後にのち化くわるは言こと語ごをかけしのこ互あ互あ憂うれをい語ごらば
 夢ゆめよ昔思おもつはるは心こゝろ地ちをい外あ別べれは袂たもとをい手て浴ありし居い屋いくく居い居いしが
 別べれは臨りん忍にんよといふ文ぶん字じをいれば支さへし今このよ夜よあのべといふ謎めをいと
 人のひと麻あ静しやうまはをい俵たわをい俵たわ小こ栗りがい卧ふ所ところのい叔お母ははこの世このよ耐たえの家やのい女め児こ
 老お見みをい想おもふは人ひとのい不ふ意い今このよ宵よもい家や不ふ宿しゆくしの月つき下した翁おきなのいひきめらせかしは
 機き會あひのいめはしと心こゝろはいくもうちはいけし想おもひのちと我われ知しらせんと已おはしが

国くにをい忍しのびし出いたとううううては身み小こされては我われよりま前まはい刃やいばのいり敬やう馬ばはくも
 河かりて膝ひざをい震ふるむ星ほしをいけられしては女めのいさなりまては安やすはく人ひと甲か夜よのいちち
 殿とのよまはらはら娼あしひ妓ぎらのうらまて誰たれのい客きやく人ひとはい懸かり想おもひをい居るが忍しのびてくい居る
 夢ゆめてありぬ人ひと。免まれぬ角かくすは我われ意いのい妨たがひとせしひと。おのれも忍しのびて
 申まへられぬと咎とが人ひともいなく。既すでにい低ひて紫むら一いつ居る。照あ天あまをい知しらせて
 浴あ室むろをい夫おのい謎めをい猜な解げここといふは娼あしひ妓ぎのいありて今このよにい忍しのびて夫おのい婦はをい乃な
 上うをい忍しのびて知しらせんといふ。もてあらんぬ入いれはれぬ一いつ大おほ事ことといふは椽えんのいあらるる
 樹いのい木き陰かげをい身みにい次つぎ陰かげ。背あ射あ光ひかり景かげをい窓まどにい居いるも知しらせて
 花はな児このいふと既すでにいりぬがいてあらぬ今このよまに居いるは女め子このいさなもいかんへは縁えんが
 河かのい尚なほくまくは願ねが望ぼうせと影かげをい身みにいるは思おもひをい我われにいぬは同どうにい此このよ国くにの

裡へ忍び入はる。あるぬもて櫃の中へひのけんとて是も付助重
衣もく燈火を覆ひ陰し。まら出たり。一人の女子の忍び居
る子也。黒夜にほまれり花見も。よく足定む引入れり。世時
小毎の一人。廁は往んと此国房の縁を侍ひて。目今花見
此国房。忍び入るを察し。人心裡に相心あり。まら。右き人。されば甲夜お
敵よ。まら。うり。女系のうらを語らひ。忍び入るよと。忍び入る。紙燭は
うち。お。まん。と。せ。い。あ。ても。女児が。前刺の。動靜。を。あり。が。よ。え。は。れ。か。
右女児。あ。の。あ。ら。は。り。と。櫃の。影。あ。を。ま。ら。て。な。ち。聞。さ。る。露。さ。ら。は。
照天の庭の木陰より花見が。夫の。臥入。入るを。察し。ひ。着る。より。猛然と。嫉妬
の。心。を。動。あ。る。惡の。我。夫。や。甲夜の。謎。の。偽。を。て。敵。よ。な。ら。れ。娼婦。等の。
容貌。受。女。と。語。ら。ひ。て。嬉。め。き。つ。つ。休。止。さ。ま。よ。さ。る。心。根。の。あ。ら。ざ。り。し。し。

こそ天魔や邪祟多し此邦にて。仇討の思ひも土まてありぬ。し。し。あ。て
思ひあを。ま。ら。ぬ。池。庄。司。と。な。め。し。十。く。と。し。あ。付。臣。ホ。の。一。人。も。ま。ら。ん。え
が。ゆ。ら。彼。們。も。流。れ。り。子。牙。が。退。き。し。と。あ。ら。ゆ。り。從。臣。も。疎。ま。れ。東。園。の。
住居も。ま。ら。て。此。國。を。今。中。事。は。る。う。浅。穂。や。す。し。く。人。へ。疎。む。も。我。の。
死。遇。夫。の。と。た。と。命。の。失。ふ。も。誦。め。て。や。ら。お。く。る。ま。き。と。心。雄。じ。く。體。が。
寒。妻。戸。を。荒。く。ら。ち。抑。け。り。裡。に。舞。り。小。栗。より。小。毎。小。陰。を。踏。り。出。り。
縁。故。の。こ。ろ。知。り。ぬ。さ。ら。り。想。ふ。夫。の。才。れ。今。明。白。よ。人。形。と。は。つ。づ。と。ひ
か。は。ら。必。定。あり。怒。想。の。道。理。あ。ら。う。ま。ら。我。よ。任。し。絲。と。ひ。き。あ。ら
照。天。を。ひ。き。た。て。て。奥。の。か。え。を。入。よ。ま。ら。此。と。き。小。栗。を。國。の。戸。を。以。と
荒。く。ら。ち。抑。け。り。且。の。發。き。且。の。す。こ。訝。り。は。く。も。燈。架。の。小。袖。を。さ
む。ま。ら。い。う。母。照。天。姫。と。思。ひ。ま。ら。此。家。の。女。児。は。あり。し。う。ま。ら。う。悞。然。と



照天

侍

花見と臥室

小栗

世

花見

小栗

敬長して何といふべき言流なり。只忙然とはなかりし中めりて助重を
形を改め言流を正ししう花見ぬ。奈何なる縁故をりて我臥下
いづくせめふ言同もあてあふ明日こそ笑ぬ今宵はさや去るへ
我柳下惠よあふたれ人の替めんことも憂へ。さしく此正を去るへ
といふ花見の面を揚女子の身れをくねく。此正思ひのり。傍を
たすそめは我心君をえり。難面も想ひは深き恋の淵沈み
身こそ苦くたれ。糸煮のなまらざらん。明日より候で今こそ命
縮めばつゝ憂る人の傍よ死ねなればせめてのりこそ悟せり。回意を
笑ひ多し縁と意迫し恋は助重の何と回意言流なり。あふ手と組む
さし俯き。心を悩み居たりと花見の尚もさくことあり。回意のいふ
といそがと助重から言ふら。其今の初てあれど幼稚とまきより
親この許嫁せし妻もあの一夫一婦ハ衆人の常いりて二人の妻と首を
此ホの事と弁して此のゆじまひ縁と笑より花見の面を赤しきさるえ
あふ道理あがら。そのみ形後まであふん心をほごること多し。甲夜
浴室で下婢の小萩と寝く物語は涙は咽ひあふことさてまご坂本
此正忍び身かく体折く。小臈は霞の星影よさくりに誰と弁ねど
一人の女が妻戸の外身を潜めはく。そと裡の光糸を空かふさる不中
おのひ躊躇ら其影こくをりけまはさるるも忍入り。物語り
さくと相ひり。妻戸の外身をよし。此規ふ処をおんこまら。引入れ
まご。けまは。燈架も小袖をかけおきまふて。今宵女を忍びて流るひ
あふ。あふ。さる。い。く。で。斯。ま。ら。け。を。せ。ん。欺。ま。あ。も。程。こ。の。れ。女。の
身。か。て。恥。づ。は。し。く。云。出。は。ら。を。お。け。あ。ま。れ。何。面。目。に。存。命。と。か。稱。く

五ノ八ノ八

一ノ二

用意の短刀にて既^も自害と云へばはれ小栗慌^{あつ}たか
 ちやまりのあひこと其短刀を取んとせんと花見の放^{はな}まき止めりふ
 我忠を称^なく多く存^{ぞん}ひ心^{こころ}小栗頭をらな低^ひてす其^{その}平^{へい}の志^しも用^{もち}も
 しく自害^{じがい}志^しありや父母の嘆^{なげ}のいふむろ子^こして我^{わが}を思^{おも}うぬ人の
 心^{こころ}あはぬぞし熱^{あつ}く思^{おも}ひ弁^{べん}人^{ひと}と誅^{つげ}をじく已^{おの}がず迫^{せま}り一^{いつ}言^{ごん}を
 脱^{だつ}まんとされども花見のあはれを借^かしまうく小情^{せうじやう}すその正^{ただ}まこと又^{また}え
 るあ恨^{うらみ}とありさくそれより此^{こゝ}手^てを放^{はな}ち死^しすはしめんと至^{いた}りし小栗
 やとく慰^{なぐさ}解^げくの詮^{せん}とべりなれ折^{せり}るに匡^{けい}の妻^{つま}戸^とをたしり此^{こゝ}悲^{かな}お
 入^いりてくこそわれ小栗驚^{おどろ}きあり仰^{おほ}き着^きる不^ふ審^{しん}や此^{こゝ}家^やの妻^{つま}小栗
 一人の女子の身を扱^{あつか}てすありたり誰^{たれ}とやとせし熱^{あつ}く照^あ天^{てん}姫^{ひめ}ゆく
 のりしあ再^{また}以^{もつ}てましまとふの首^{くび}を低^ひてさざり一言^{いつごん}守^{まも}るの云^い信^{しん}は

あのと花見の小栗が手のゆるむ乗^{のり}短刀をぬくよりを中^{ちゆう}胸^{ちゆう}下^げわ
 刺^さ貫^{くわん}くんとさう短^{たん}を小^{せう}世^せを中^{ちゆう}かきさめやまりと我^{わが}女^{によ}見^み奴^{にや}の心^{こころ}を
 へきさるあふ今^{いま}世^よ耐^たり行^ゆを俟^{まち}と小栗を顧^{かへり}着^き世^よの間^まに並^{なら}ぶの心^{こころ}
 不^ふのりおきりのゆい奴^{にや}家^やが此^{こゝ}所^{ところ}出^い来^き今^{いま}世^よの始^{はじめ}終^{はつしゆう}を熱^{あつ}く
 女^{によ}見^み願^{ねが}ことかまへんぬともく花見の奴^{にや}家^やの實^{まこと}の子^こをくありぬこの
 見^みが三^{さん}文^{ぶん}の秋^{あき}のよ実^{まこと}母^{はは}の辞^{ことば}世^よの奴^{にや}家^やの耐^たり女^{によ}まて年^{とし}紀^きもいまご
 と右^{みぎ}のりよ奈^な何^{なに}過^と世^よの契^{ちぎ}めや前^{まへ}妻^{つま}とてその後^{のち}に花^{はな}見^み奴^{にや}の心^{こころ}
 襟^{えり}を離^{はな}る間^まもなく実^{まこと}の母^{はは}の心^{こころ}をわらふ小^{せう}主^{しゆう}の長^{なが}もおのが子^こを
 心^{こころ}に化^{くわ}人の手^てへはかかほぬ遠^{とほ}く此^{こゝ}身^みを後^{のち}妻^{つま}と定められけりし
 なる故^{ゆゑ}の主^{しゆう}は花^{はな}見^みをりて我^{わが}子^こと呼^よび畏^{かしこ}まれと今^{いま}更^{さら}に親^{おや}子^こなり
 心^{こころ}に敬^{かしこ}みへるものぬあはれ生^なる實^{まこと}は血^ちに成長^{せいじやう}を志^しは

今此所をばあつとぞし宗丹ぬも我女見も小菟がらん道埋成よう
 二れてしづれとも心のまふくなく縁とて紙門の外はほうてなり跡よ一人
 教合し夢村言徳もなつりしが中のでて照天姫小栗と對して玄出
 まるゆの甲夜の海と湯殿おいら殿見よに別送しまよゆらふ
 如何あもして今一回えすわらさるよとふりとおりのあははけく縁
 より家の制の厳小吳婢の才と此とて縁へ寄もあははことなら
 二れをたつちの乱さふうち志と前刺小刃びりあかた気さる夫人
 見処めたまひも志を何なれ憂同小逢あやんと易き心もあら
 ざして母そのまゝ裡不伴ひ多ひ多く憂恤そのうめて埋なくやえ
 身あわはことか才のう粗知りぬそと人ふ漏さばして此行めて過さんと
 さらばも深き頼ありかことの才おるとはさきことあらあれと承

やと想ひありまきり宜らと主人といひ且つまご我才のうと知り形から
 家制を破つと糸針を免さる恩あれはいつて輝とまへんき奴家力
 小筋ふこと余中撫と舟とと回夜中せが姉と多ひ人の親し已
 子の姪行とたを戒めてさうく不義を募らぬ人け非語やせのきこ
 思らねとあつた縁とも義理ある我見が命と換へ眷感せとさう捨
 おきり死もさる船とふいうか悔あとも甲斐のほしそもく女見が志
 人と今宵我家に宿りて休宗且主とて侍りなり彼人の縁を驚き
 大きかりな志氣あり爾とて女見がいうゆととも此意叶ふうもはした
 只おとをそそ氷人せんら做ひる此事成るが長と嘆死今よん
 その才の職をさし心のまふくまごてと深く軽さひと不骨あ
 才を以て好才もあらぬ客人は氷人せんを志ひもかけるとさる不あ

想ひしと既に結ぶうかから辭べしやうも形一夫さんあつた奴は承承乃
 悪を知りては咎めもせよ尚も此身の暇をともし心のよきいさよと
 情のりほる主命に及ぶぬまでもと縁へり。あがき妹脊の結ぶごと
 一回の遠慮あつたら花見ぬらさつらふもゆつと主夫婦のよ縁ごと
 此のふも及ぶと正るおほきとむねて無意うあてきく。ハ護ハ
 好むと殿の心おとつゆ。人の命の二三。云々。作人。大和唐
 古昔より妻の外小妾をおく。例も多くは花見を愛したまふ
 ともいうで嬌あつたひあうん無道理を弁ふと言悟をそして諱れば
 小東客を正しく我其をを知らぬ小あつた。爾あれ人ハ其後あり。
 我ホつと甲斐なれりの一婦の對他妻は其既よ妻あつたといふ
 正な此事をせん出るゆゑの免れ縁と深ふ氣多ふ人まれば照天再ひ
 云々。四意あつた道理あつた。奴家か云々の云語をせまる。つら
 のうらうらなる害が出まらんそれのみ形と世身まで幸は夏夏は
 運ぬらんかのいそれぬ言ね。昔よりして武士の口を知られらる人
 心強きの形は情もまこと多うれが今の世までも然る人をば
 実もある君子と侍人の世を忍びおそそと容貌もまづ一
 武士より殿の回意の一言が花見奴家が生死の境とや。縁と回する
 小栗の妻の言語の端生の実意を氷人と猜察されとしてまづ相心を
 かさくはさせんとささむらひあさきやうもなり。さうらつて回意を
 時。俄に戸の外よ人の来れる氣をいさよ誰なる人とこ人がいふり
 えればこのいふみ盗人めは。大澤子七八人うらほれ。各手に白又
 折る。戸を押中より勢を入り。中にも前よ進する。五十むらりの

川西卷之八

十一

大漢子声を荒らげ云へり多岐の今日宝光院まで此家の女兒と酒を
呑んと志ざりしは汝不意よ申す妨りて女兒を奪ふて鼻を
させり。我くあまりのまむ旅人と偽り此家も宿り、女兒を連行敵
らんとせんと甲夜より光景を夜に汝を我れに汝を我れに我れに
負せ終つ小兒を欺ひて我れに汝の樂酒我れにひとせんと目今
此もへりし徒小兒つらも風情な。必ひ付くる橋門の會なり終
ばも劍舞一曲舞ひて看よせんいさく受ねと圓ひとり小栗完示と
らちのちいしもの申しき各有うお賞察してうせん。腰刀を抜き
多岐をおもふた一人おまのこくおまの切てまわれハ大勢ハ中
五曲討取んと秘術をてて戦へも鬼神も欺く助きが微妙のた刀を
あいらへる。浅傷重傷を負ねのなく進まかひとるりけり。其時

前よりいひくは大ねめき、盗人が甲斐なれりの、秘術くれ彼後行
の事あつんので我手つとをんまへと踏出れハ小栗ハ聲で嗚呼乃
白痴此刀受く、其泉中去下とせ、一文字切切たりを、お好りと受
流し、透を討んとさるるを、小栗息慄く打太刀を受、留りて、嗚呼
肩より乳まで切まけられ、よろめく、妙を踏んて、終つ、両断となり、又
主石長ハ、小栗が卧所の強よて睡を醒し、耳をさて、耳ハ白刃を接ゆる
この盗人の入あり、我恩人と戦ふあそと、驚き、は、も声あり、た、渾身の
ののを呼起し、下僕数多を、引連し、夫婦めちも走す、あ、れ、生、残、し、は
悪漢とも小栗が、手か、み、を、知、り、且、大、勢、の、身、を、さ、ん、切、り、や
と、い、ん、と、お、散、り、申、逃、失、り、万、長、夫、婦、ハ、此、下、す、あ、り、熟、く、ん、切、
殺され、りの、今日、宝光院、申、事、を、惹、出、し、り、な、れ、順、礼、の、終、り、あ、り、

大正
不圖
好主
杉



小栗卷之八

九四

さて悪漢小徳をのりけ。花見を春來んと志はるよとは。今又小栗が勇よらて再び花見助りぬと。小栗丹次く感涙して花見小秋亦を尋るも。花見の扉風の影りして。小秋何方を行々あやほらふ中へ。小栗の心愕然とれと明白なる。既ち胸を。驚き舟一の下僕走り自心も衝ぬと。既ち舟を立上り。耐えかねた大漢子小秋と小徳。親め。小栗驚れ。即座を立上り。耐えかねた大漢子小秋と小徳。ついで抱き外の方へ。走らせ出る。殿を逐。五七丁も走らせ。旅人め。大漢子。ひうひの方より。小秋を。打るより。急ぎ。腰刀をぬくと。漢子。切例。小秋。對ひ。何方。小栗。主万長。買取る女を。易く。おのが。想悔。

急よ搜索もせむ。小栗の下僕が物詰りを。心裡。小栗。我を。小栗。不意。照天。遺ひ。心。微。心安堵。天明の。昨夜の。一。知縣の。万長。許へ。斬殺。盗人の。屍を。強。人形。以て。搜索。田の。小。白。強盗。此。一件の。事。細。小栗。照天。安否。知。心。念。主万長。別。告。還。去。主。ひ。き。て。某。出。お。既。女。見。下。春。想。死。妻。物。詰。承。り。ぬ。我。妻。子。彼。今。

くらやなり侍も足下の光景を察す唯人あてははるし
 さぞ泣かぬおやまゆゆらか凡人の望まはれしを果さぬの欺用の
 さはが故なり我富といふら何れねどまはれしものいふを今女兒
 妻としてさふ終ひるが我財はる寶のかきりまの残りなく譲り
 ちまへていふれをりておぼしたるまことを果し多く此奉養に
 つぶさる足下の上を粗ちりぬ恨まやさん術もあれと子故おまふ
 親心さひありげはまへられ小栗熟くうちまふ今万長があらぬお
 逆り我身の上は知らうかやい一さふ内通一宿志の妨せんや当里
 知らねぬゆめなれど仮も花見と妹背の語らひせん我妻の想らん
 処も公若しこの奈何しを宜らんとと思ひ悩んで居たりけ体々の村少
 さとみ出小栗まひくひくまへりまの刺す小栗が氷人しく既
 落ひるひい今氷人の居るねとて辞すゆめ正まされんかあま
 小萩が行来をよかけまふや彼がゆめ我もいいて麻呂存むと
 一日二日のうち母の必さを尋むゆめを易や此所よおまへて還
 りまふ候多くと云ふ小萩と足下と夫婦なりと知れども夫との
 いふて余亦ながら小栗がて流を安堵させ置か止さしそのうち
 女兒が恋を移くと夫婦交りかたけいいうかされとも還さぬ小栗も
 今へ塗方なく一日くく止められ心も居たりたる放下一頭却説
 這裏美登小を御を小栗が宝光院并詣はる村徒者して行り
 俄丹赤坂まで所用つてまきく彼取使はゆき用のことと敷正々
 寶光院へ入り主人を尋ふお妙れど人おまけとも多れお詣の
 かくいふ船知らぬとまこのはよまて待らびらひ禁まらぬ酒肆

むんごよ入すあゆめり也と山をとり酒肆旅店より紀年と容貌と
 をさひと尋ねれど曾て知事と向きの小素ちり秘く明日まこと糸
 ちやと林麻の旅店も一宿しられが夜まじりり紙門開く旅人乃
 連なる人と物結り次々登り昼不と虚空菟堂の前ゆく青墓の宿の
 万長とやうんゆ者の女見悪漢ホの為小悩まされと研馬おまひし
 おき人助け援ひより世ある惜の体人も有る様よと云ふ小太郎さう
 この平く王君助重との相遠のるほど喜びは起せ彼旅人か
 女を救ひ小羊何方へ行々体と同く旅人のいふ其人をいふ長健ひ
 去ぬと回意されればこそと夫より直よ万長が許し往て途ゆく
 女を扱ひする大漢子六七人を行遭とり不中ぬ熱くをれ照天姫
 ぬてありし縁故を問くと娘を牽とてすまり漢子と刃殺し残るを

逐散し照天を助け縁故を問へ六浦まで夫が別れ涙浪毒手すわひ
 祝言の冥助おしつて薫松の危難を脱れ徳を徳めて人買の手は腹下
 万長が許し小賣りされ多くの苦難を凌ぎ存生居るうら今夜すさ
 夫と思ふ互に刃の憂を語りんと夫の困小忍ひ一に縁主の女見
 夫を春遊してこれか乃小忍びしめれ形さるり其折を盗人ありて
 春帯ひ去られ此更すありねと首より尾小至るまで詳に物語れ美登
 小太郎これを笑らち且に嘆れ且を怒りしうどもまづんぬ姫の恙なれとさ
 急ぎ主君小栗を迎へ侍らんとせしが孰く思惟邂逅は還念はる照天姫
 を若万長を取戻されれば惜まらぬ主君の勇知もに侍りし大將
 かねばかかて恙なく還らんとそれより姫を伴ひ三羽を還り小栗の困
 居の元山里に忍び置主の還りを俟まさるに音同く小はあまりの

おぼくがさうおまの近ちかひ小こ往いくと幾い回くわい想おもひをすを。近ちかひの世よの國くにの
 光景あきざね群ぐん盜とう蜂ほう起おこし尋たづ常じょうの人ひととしとも荒あじく。其その心こころを免ゆるされれ福ふくからら
 尾山おのやま陰かげ小こ姫ひめ一人ひとりおおく又また念ねん何なにこごとううしてま形かたちと心こころ安やす堵とまますを。これはお
 形かたちもなかかしく人ひとを雇かふと万まん長ぢやうが伴ばんかかりて小こ栗りに書かきかへせんを送くわり
 されど万まん長ぢやうも漏もれれこと瓜うり怖おそままて照て天てんのことらら露つゆどうりもも写あららせせんを
 速すみにかへりあままと而つ已こひひかります。

小栗外傳卷之八畢



以いろろ栗り

ふふののめめそそがが

いいろろ栗り

